秋風記

太宰治

立ちつくし、
ものを思へば、
ものみなの物語めき、
(生田長江)

あの、私は、どんな小説を書いたらいいのだろう。私は、物語の洪水の中に住んでいる。役者になれば、よかった。私は、私の寝顔をさえスケッチできる。私が死んでも、私の死顔を、きれいにお化粧してくれる、かなしいひとだって在るのだ。Ｋが、それをし

てくれるであろう。
Ｋは、私より二つ年上なのだから、ことし三十二歳の女性である。
Ｋを、語ろうか。
Ｋは、私とは別段、血のつながりは無いのだけれど、それでも小さいころから私の家と往復して、家族同様になっている。そうして、いまはＫも、私と同じ様に、「生れて来なければよかった。」と思っている。生れて、十年たたぬうちに、この世の、いちばん美しいものを見てしまった。いつ死んでも、悔いがない。けれども、Ｋは、生きている。子供のために生きている。それか

ら、私のために、生きている。
「K、僕を、憎いだろうね。」
「ああ、」Kは、厳粛にうなずく。「死んでくれたらいいと思うことさえあるの。」
ずいぶん、たくさんの身内が死んだ。いちばん上の姉は、二十六で死んだ。父は、五十三で死んだ。末の弟は、十六で死んだ。三ばん目の兄は、二十七で死んだ。ことしになって、そのすぐ次の姉が、三十四で死んだ。甥（おい）は、二十五で、従弟（いとこ）は、二十一で、どちらも私になついていたのに、やはり、ことし、相ついで死んだ。

どうしても、死ななければならぬわけがあるのなら、打ち明けておくれ、私には、何もできないだろうけれど、二人で語ろう。一日に、一語ずつでもよい。ひとつきかかっても、ふたつきかかってもよい。私と一緒に、遊んでいておくれ。それでも、なお生きてゆくぁてがつかなかったときには、いいえ、そのときになっても、君ひとりで死んではいけない。そのときには、私たち、みんな一緒に死のう。残されたものが、可哀そうです。君よ、知るや、あきらめの民の愛情の深さを。

Kは、そうして、生きている。

ことしの晩秋、私は、格子縞（こうしじま）の鳥打帽をまぶかにかぶって、Kを訪れた。口笛を三度すると、Kは、裏木戸をそっとあけて、出て来る。

「いくら？」

「お金じゃない。」

Kは、私の顔を覗（のぞ）きこむ。

「死にたくなった？」

「うん。」

Kは、かるく下唇を嚙む。

「いまごろになると、毎年きまって、いけなくなるらしいのね。寒さが、こたえるのかしら。羽織（はおり）ないの？

おや、おや、素足で。」
「こういうのが、粋（いき）なんだそうだ。」
「誰が、そう教えたの？」
私は溜息（ためいき）をついて、「誰も教えやしない。」
Kも小さい溜息をつく。
「誰か、いいひとがないものかねえ。」
私は、微笑する。
「Kとふたりで、旅行したいのだけれど。」
Kは、まじめに、うなずく。
わかっているのだ。みんな、みんな、わかっている

のだ。Ｋは、私を連れて旅に出る。この子を死なせてはならない。

その日の真夜中、ふたり、汽車に乗った。汽車が動き出して、Ｋも、私も、やっと、なんだか、ほっとする。

「小説は？」

「書けない。」

まっくら闇の汽車の音は、トラタタ、トラタタ、トラタタタ。

「たばこ、のむ？」

Ｋは、三種類の外国煙草を、ハンドバッグから、つ

ぎつぎ取り出す。

いつか、私は、こんな小説を書いたことがある。死のうと思った主人公が、いまわの際に、一本の、かおりの高い外国煙草を吸ってみた、そのほのかなよろこびのために、死ぬること、思いとどまった、そんな小説を書いたことがある。Ｋは、それを知っている。

私は、顔をあからめた。それでも、きざに、とりすまして、その三種類の外国煙草を、依怙贔屓（えこひいき）なく、一本ずつ、順々に吸ってみる。

横浜で、Ｋは、サンドイッチを買い求める。

「たべない？」

Kは、わざと下品に、自分でもりもり食べて見せる。私も、落ちついて一きれ頬ばる。塩からかった。

「ひとことでも、ものを言えば、それだけ、みんなを苦しめるような気がして、むだに、くるしめるような気がして、いっそ、だまって微笑(ほほえ)んで居れば、いいのだろうけれど、僕は作家なのだから、何か、ものを言わなければ暮してゆけない作家なのだから、ずいぶん、骨が折れます。僕には、花一輪をさえ、ほどよく愛することができません。ほのかな匂いを愛(め)ずるだけでは、とても、がまんができません。突風の如く手折(たお)って、掌にのせて、花びらむしって、それから、もみくちゃ

にして、たまらなくなって泣いて、唇のあいだに押し込んで、ぐしゃぐしゃに噛んで、吐き出して、下駄でもって踏みにじって、それから、自分で自分をもて余します。自分を殺したく思います。僕は、人間でないのかも知れない。僕はこのごろ、ほんとうに、そう思うよ。僕は、あの、サタンではないのか。殺生石。毒きのこ。まさか、吉田御殿とは言わない。だって、僕は、男だもの。」

「どうだか。」Kは、きつい顔をする。

「Kは、僕を憎んでいる。僕の八方美人（はっぽうびじん）を憎んでいる。ああ、わかった。Kは、僕の強さを信じている。僕の

才を買いかぶっている。そうして、僕の努力を、ひとしれぬ馬鹿な努力を、ごぞんじないのだ。らっきょうの皮を、むいてむいて、しんまでむいて、何もない。きっとある、何かある、それを信じて、また、べつの、らっきょうの皮を、むいて、むいて、何もない、この猿のかなしみ、わかる？　ゆきあたりばったりの万人を、ことごとく愛しているということは、誰をも、愛していないということだ。」

Ｋは、私の袖（そで）をひく。私の声は、人並はずれて高いのである。

私は、笑いながら、「ここにも、僕の宿命がある。」

湯河原（ゆがわら）。下車。

「何もない、ということ、嘘だわ。」Kは宿のどてらに着換えながら、そう言った。「この、どてらの柄（がら）は、この青い縞（しま）は、こんなに美しいじゃないの？」

「ああ、」私は、疲れていた。「さっきの、らっきようの話？」

「ええ、」Kは、着換えて、私のすぐ傍にひっそり坐った。「あなたは、現在を信じない。いまの、この、刹那（せつな）を信じることできる？」

Ｋは少女のように無心に笑って、私の顔を覗き込む。

「刹那は、誰の罪でもない。誰の責任でもない。それは判っている。」私は、旦那様のようにちゃんと座蒲団に坐って、腕組みしている。「けれども、それは、僕にとって、いのちのよろこびにはならない。死ぬる刹那の純粋だけは、信じられる。けれども、この世のよろこびの刹那は、――」

「あとの責任が、こわいの？」

Ｋは、小さくはしゃいでいる。

「どうにも、あとしまつができない。花火は一瞬でも、肉体は、死にもせず、ぶざまにいつまでも残っている

からね。美しい極光を見た刹那に、肉体も、ともに燃えてあとかたもなく焼失してしまえば、たすかるのだが、そうもいかない。」

「意気地がないのね。」

「ああ、もう、言葉は、いやだ。なんとでも言える。刹那のことは、刹那主義者に問え、だ。手をとって教えてくれる。みんな自分の料理法のご自慢だ。人生への味附けだ。思い出に生きるか、いまのこの刹那に身をゆだねるか、それとも、――将来の希望とやらに生きるか、案外、そんなところから人間の馬鹿と悧巧（りこう）のちがいが、できて来るのかも知れない。」

「あなたは、ばかなの？」
「およしよ、K。ばかも悧巧もない。僕たちは、もっとわるい。」
「教えて！」
「ブルジョア。」
それも、おちぶれたブルジョア。罪の思い出だけに生きている。ふたり、たいへん興ざめして、そそくさと立ちあがり、手拭い持って、階下の大浴場へ降りて行く。
過去も、明日も、語るまい。ただ、このひとときを、情にみちたひとときを、と沈黙のうちに固く誓約して、

私も、Ｋも旅に出た。家庭の事情を語ってはならぬ。身のくるしさを語ってはならぬ。明日の恐怖を語ってはならぬ。人の思惑を語ってはならぬ。きのうの恥を語ってはならぬ。ただ、このひととき、せめて、このひとときのみ、静謐(せいひつ)であれ、と念じながら、ふたり、ひっそりからだを洗った。

「Ｋ、僕のおなかのここんとこに、傷跡があるだろう？　これ、盲腸の傷だよ。」

Ｋは、母のように、やさしく笑う。

「Ｋの脚だって長いけれど、僕の脚、ほら、ずいぶん長いだろう？　できあいのズボンじゃ、だめなんだ。

何かにつけて不便な男さ。」
Ｋは、暗闇の窓を見つめる。
「ねえ、よい悪事って言葉、ないかしら。」
「よい悪事。」私も、うっとり呟いてみる。
「雨？」Ｋは、ふと、きき耳を立てる。
「谷川だ。すぐ、この下を流れている。朝になってみると、この浴場の窓いっぱい紅葉だ。すぐ鼻のさきに、おや、と思うほど高い山が立っている。」
「ときどき来るの？」
「いいえ。いちど。」
「死にに。」

「そうだ。」
「そのとき遊んだ？」
「遊ばない。」
「今夜は？」Kは、すましている。
私は笑う。「なあんだ、それがKの、よい悪事か。なあんだ。」僕はまた、――」
「なに。」
私は決意して、「僕と、一緒に死ぬのかと思った。」
「ああ、」こんどは、Kが笑った。「わるい善行って言葉も、あるわよ。」
浴場のながい階段を、一段、一段、ゆっくりゆっくく

り上る毎に、よい悪事、わるい善行、よい悪事、わるい善行、よい悪事、わるい善行、……。
芸者をひとり、よんだ。
「私たち、ふたりで居ると、心中しそうで危いから、今夜は寝ないで番をして下さいな。死神が来たら、追っ払うんですよ。」Kがまじめにそう言うと、
「承知いたしました。まさかのときには、三人心中ということもあります。」と答えた。
観世縒（かんぜより）に火を点じて、その火の消えないうちに、命じられたものの名を言って隣の人に手渡す、あの遊戯をはじめた。ちっとも役に立たないもの。はい。

「片方割れた下駄。」
「歩かない馬。」
「破れた三味線。」
「写らない写真機。」
「つかない電球。」
「飛ばない飛行機。」
「それから、――」
「早く、早く。」
「真実。」
「え？」
「真実。」

「野暮（やぼ）だなあ。じゃあ、忍耐。」
「むずかしいのねえ、私は、苦労。」
「向上心。」
「デカダン。」
「おといのお天気。」
「私。」Ｋである。
「僕。」
「じゃあ、私も、――私。」火が消えた。芸者のまけである。
「だって、むずかしいんだもの。」芸者は、素直にくつろいでいた。

「K、冗談だろうね。真実も、向上心も、Kご自身も、役に立たないなんて、冗談だろうね。僕みたいな男だっても、生きて居る限りは、なんとかして、立派に生きていたいとあがいているのだ。Kは、ばかだ。」

「おかえり。」Kも、きっとなった。「あなたのまじめさを、あなたのまじめな苦しさを、そんなに皆に見せびらかしたいの?」

芸者の美しさが、よくなかった。

「かえる。東京へかえる。お金くれ。かえる。」私は立ちあがって、どてらを脱いだ。

Kは、私の顔を見上げたまま、泣いている。かすか

に笑顔を残したまま、泣いている。
私は、かえりたくなかった。誰も、とめてはくれないのだ。えい、死のう、死のう。私は、着物に着換えて足袋(たび)をはいた。
宿を出た。走った。
橋のうえで立ちどまって、下の白い谷川の流れを見つめた。自分を、ばかだと思った。ばかだ、ばかだ、と思った。
「ごめんなさい。」ひっそりKは、うしろに立っている。
「ひとを、ひとをいたわるのも、ほどほどにするがい い。」私は泣き出した。

宿へかえると、床が二つ敷かれていた。私は、ヴェロナアルを一服のんで、すぐに眠ったふりをした。しばらくして、Ｋは、そっと起きあがり、同じ薬を一服のんだ。

あくる日は、ひるすぎまで、床の中でうつらうつらしていた。Ｋはさきに起きて、廊下の雨戸をいちまいあけた。雨である。

私も起きて、Ｋと語らず、ひとりで浴場へ降りていった。

ゆうべのことは、ゆうべのこと。ゆうべのことは、

ゆうべのこと。——無理矢理、自分に言いきかせながら、ひろい湯槽（ゆぶね）をかるく泳ぎまわった。

湯槽から這い出て、窓をひらき、うねうね曲って流れている白い谷川を見おろした。

私の背中に、ひやと手を置く。裸身のKが立っている。

「鶺鴒（せきれい）。」Kは、谷川の岸の岩に立ってうごいている小鳥を指さす。「せきれいは、ステッキに似ているなんて、いい加減の詩人ね。あの鶺鴒は、もっときびしく、もっとけなげで、どだい、人間なんてものを問題にしていない。」

私も、それを思っていたのだ。

Kは、湯槽にからだを、滑りこませて、

「紅葉（もみじ）って、派手な花なのね。」

「ゆうべは、――」私が言い澱（よど）むと、

「ねむれた？」無心にたずねるKの眼は、湖水のように澄んでいる。

私は、ざぶんと湯槽に飛び込み、「Kが生きているうち、僕は死なない、ね。」

「ブルジョアって、わるいものなの？」

「わるいやつだ、と僕は思う。わびしさも、苦悩も、感謝も、みんな趣味だ。ひとりよがりだ。プライドだ

けで生きている。」

「ひとの噂だけを気にしていて、」Kは、すらと湯槽から出て、さっさとからだを拭きながら、「そこに自分の肉体が在ると思っているのね。」

「富めるものの天国に入るは、——」そう冗談に言いかけて、ぴしと鞭打たれた。「人なみの仕合せは、むずかしいらしいよ。」

Kはサロンで紅茶を飲んでいた。

雨のせいか、サロンは賑っていた。

「この旅行が、無事にすむと、」私は、Kとならんで、

山の見える窓際の椅子に腰をおろした。「僕は、Ｋに何か贈り物しようか。」

「十字架。」そう呟くＫの頸（くび）は、細く、かよわく見えた。

「ああ、ミルク。」女中にそう言いつけてから、「Ｋ、やっぱり怒っているね。ゆうべ、かえるなんて乱暴なこと言ったの、あれ、芝居だよ。僕、——舞台中毒かも知れない。一日にいちど、何か、こう、きざに気取ってみなければ、気がすまないのだ。生きて行けないのだ。いまだって、ここにこうやって坐っていても、死ぬほど気取っているつもりなのだよ。」

「恋は？」

「自分の足袋のやぶれが気にかかって、それで、失恋してしまった晩もある。」

「ねえ、私の顔、どう？」Ｋは、まともに顔をちか寄せる。

「どう、って。」私は顔をしかめる。

「きれい？」よそのひとのような感じで、「わかく見える？」

私は、殴りつけたく思う。

「Ｋ、そんなに、さびしいのか。Ｋ、おぼえて置くがいい。Ｋは、良妻賢母で、それから、僕は不良少年、ひとの屑（くず）だ。」

「あなただけ、」言いかけたとき、女中がミルクを持って来る。「あ、どうも。」
「くるしむことは、自由だ。」私は、熱いミルクを啜(すす)りながら、「よろこぶことも、そのひとの自由だ。」
「ところが、私、自由じゃない。両方とも。」
私は深い溜息をつく。
「K、うしろに五、六人、男がいるね。どれがいい？」
つとめ人らしい若いのが四人、麻雀(マージャン)をしている。ウイスキーソーダを飲みながら新聞を読んでいる中年の男が、二人。
「まんなかのが。」Kは、山々の面を拭いてあるいてい

る霧の流れを眺めながら、ゆっくり呟く。
　ふりむいて、みると、いつのまにか、いまひとりの青年が、サロンのまんなかに立っていて、ふところ手のまま、入口の右隅にある菊の生花を見つめている。
「菊は、むずかしいからねえ。」Kは、生花の、なんとか流の、いい地位にいた。
「ああ、古い、古い。あいつの横顔、晶助兄さんにそっくりじゃないか。ハムレット。」その兄は、二十七で死んだ。彫刻をよくしていた。
「だって、私は男のひと、他にそんなに知らないのだもの。」Kは、恥ずかしそうにしていた。

号外。

女中は、みなに一枚一枚くばって歩いた。——事変以来八十九日目。上海（シャンハイ）包囲全く成る。敵軍潰乱（かいらん）全線に総退却。

Kは号外をちらと見て、

「あなたは？」

「丙種。」

「私は甲種なのね。」Kは、びっくりする程、大きい声で、笑い出した。「私は、山を見ていたのじゃなくってよ。ほら、この、眼のまえの雨だれの形を見ていたの。みんな、それぞれ個性があるのよ。もったいぶって、

ぽたんと落ちるのもあるし、せっかちに、痩せたまま落ちるのもあるし、気取って、ぴちゃんと高い音たてて落ちるのもあるし、つまらなそうに、ふわっと風まかせに落ちるのもあるし、――」

Kも、私も、くたくたに疲れていた。その日湯河原を発って熱海についたころには、熱海のまちは夕靄につつまれ、家家の灯は、ぼっと、ともって、心もとなく思われた。

宿について、夕食までに散歩しようと、宿の番傘を二つ借りて、海辺に出て見た。雨天のしたの海は、だ

るそうにうねって、冷いしぶきをあげて散っていた。ぶあいそな、なげやりの感じであった。
ふりかえって、まちを見ると、ただ、ぱらぱらと灯が散在していて、
「こどものじぶん、」Kは立ちどまって、話かける。「絵葉書に針でもってぷつぷつ穴をあけて、ランプの光に透かしてみると、その絵葉書の洋館や森や軍艦に、きれいなイルミネエションがついて、——あれを思い出さない？」
「僕は、こんなけしき、」私は、わざと感覚の鈍い言いかたをする。「幻燈で見たことがある。みんなぼっと

かすんで。」
海岸通りを、そろそろ歩いた。「寒いね。お湯には いってから、出て来ればよかった。」
「私たち、もうなんにも欲しいものがないのね。」
「ああ、みんなお父さんからもらってしまった。」
「あなたの死にたいという気持、――」Kは、しゃがんで素足の泥を拭きながら、「わかっている。」
「僕たち、」私は十二、三歳の少年の様に甘える。「どうして独力で生活できないのだろうね。さかなやをやったって、いいんだ。」
「誰も、やらせてくれないよ。みんな、意地わるいほ

ど、私たちを大切にしてくれるからね。」
「そうなんだよ、K。僕だって、ずいぶん下品なことをしたいのだけれど、みんな笑って、――」魚釣る人のすがたが、眼にとまった。「いっそ、一生、釣りでもして、阿呆(あほう)みたいに暮そうかな。」
「だめさ。魚の心が、わかりすぎて。」
ふたり、笑った。
「たいてい、わかるだろう？　僕がサタンだということ。僕に愛された人は、みんな、だいなしになってしまうということ。」
「私には、そう思えないの。誰もおまえを憎んでいな

い。偽悪趣味。」

「甘い？」

「ああ、このお宮の石碑みたい。」路傍に、金色夜叉の石碑が立っている。

「僕、いちばん単純なことを言おうか。K、まじめな話だよ。いいかい？　僕を、――」

「よして！　わかっているわよ。」

「ほんとう？」

「私は、なんでも知っている。私は、自分がおめかけの子だってことも知っています。」

「K。僕たち、――」

「あ、危い。」Ｋは私のからだをかばった。ばりばりと音たててＫの傘が、バスの車輪にひったくられて、つづいてＫのからだが、水泳のダイヴィングのようにすらっと白く一直線に車輪の下に引きずりこまれ、くるくるっと花の車。

「とまれ！　とまれ！」

私は丸太棒でがんと脳天を殴られた思いで、激怒した。ようやくとまったバスの横腹を力まかせに蹴上げた。Ｋはバスの下で、雨にたたかれた桔梗（ききょう）の花のように美しく伏していた。この女は、不仕合せな人だ。

「誰もさわるな！」

私は、気を失っているＫを抱きあげ、声を放って泣いた。

ちかくの病院まで、Ｋを背負っていった。Ｋは小さい声で、いたい、いたい、と言って泣いていた。

Ｋは、病院に二日いて、駈けつけて来たうちの者たちと一緒に、自動車で、自宅へかえった。私は、ひとり、汽車でかえった。

Ｋの怪我（けが）はたいしたこともないようだ。日に日に快方に向っている。

三日まえ、私は、用事があって新橋へ行き、かえりに銀座を歩いてみた。ふと或る店の飾り窓に、銀の十字架の在るのを見つけて、その店へはいり、銀の十字架ではなく、店の棚の青銅の指輪を一箇、買い求めた。その夜、私のふところには、雑誌社からもらったばかりのお金が少しあったのである。その青銅の指輪には、黄色い石で水仙の花がひとつ飾りつけられていた。私は、それをKあてに送った。

Kは、そのおかえしとして、ことし三歳になるKの長女の写真を送って寄こした。私はけさ、その写真を

見た。

底本：「太宰治全集2」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８８（昭和63）年9月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
　　１９７５（昭和50）年6月～１９７６（昭和51）年6月刊行
入力：柴田卓治
校正：小林繁雄
１９９９年9月17日公開
２００５年10月22日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。